

加藤 泰信他

「九州の祝事」

小 泊 立 矢

過去、多くの市町村史が出ているが、こと民俗に関しては、大半がごくわずかのページをさくにすぎなかった。ところが最近では民俗学への関心も高くなったせいか、民俗関係の記述もくわしくなってきた。非常によろこばしいことである。各市町村、各地域の報告が多く出るほど、大分県の民俗を、九州あるいは全国的立場から、より広い範囲で考察できるし、さらには歴史の表面には現れにくい常民の生活についても、うかがうことができるのである。

常民の生活をうかがうことができるといっても、物質的なもの（生活用具等）から、あるいは生活技術的なものから、社会機構的なものから等々さまざまな面からの視点があり、

またそれぞれに特別なものと、日常的なものがある。生活の中における特別なものがすなわちハレ（晴）の生活で、普段、日常の生活がケ（曇）の生活である。厳しい日常の生活からの解放ともいえるハレの日には、ハレ着を着用し、ハレの食事をする。子供の誕生・婚姻・葬送などの人生儀礼、正月・盆・節供などの年中行事、季節ごとに行なわれるいろいろな祭りなど、ハレの日、ハレの行事は人々の生活に適度なリズムを与え、精神的なうるおいを与えていくものである。

本書は、このようなハレの生活のうち、誕生・婚姻・年祝いをまとめ、日本の祝事シリーズ全一〇巻としたもののうちの九州編で、加藤泰信氏をはじめ、各県の研究者の手によって執筆されている。ほぼ同一の項目で執筆されているが、内容は各県ごとに相異が見られ、通読することによって各県の習俗の理解と比較ができる。例えば、初誕生の項を見ると、物取りをさせて将来を占うのはどこでも同じであるが、その前に行う「餅踏み」は餅の形、大きさ、置く場所、子供の覆物等に少しずつ違いが見られる。

大分県では、このように全県下の「祝事」をまとめた本はなく、祝事習俗を概観するためにも是非一統したいものであ

る。ただ、これまでの明玄書房出版のシリーズでもいわれていることだが、九州全域についての総括的な項目があればよりわかりやすいのではないかと思われる。

(昭和五三年六月刊 明玄書房 五、三〇〇円)

(大分県教育委員会文化課)

新刊紹介

朝日新聞西部本社編

「六郷満山ほとけの里・国東」

今年八月三日の熊本を皮切りに、福岡、大阪、名古屋、東京と朝日新聞社主催、大分県・大分県教育委員会・国東半島の文化を守る会後援で「ほとけの里・国東秘宝展」が開催された。その際国東半島内の寺院などから出品された仏像、石造品、修正鬼会関係資料、蜂入関係資料の解説書として編集された写真集で、多くの美しい写真と丁寧な解説文が付されている。

B4版・変形大版、一八〇頁、付録「国東のみちしるべ」二四頁 二、〇〇〇円(申し込みは小泊立矢氏へ文責・小玉)